

第7回 「日本語大賞」

テーマ「^{わたし}私が^{つか}使いたい^{ことば}言葉」



中学生の部 優秀賞 受賞作品

もったいない — mottainai

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

2年 相川 佳苗

「もったいない」—この言葉に感動された一人の外国人がいる。その方はノーベル平和賞を受賞されたワンガリ・マータイさんだ。彼女は英語だと3R（リデュース・リユース・リサイクル）と三つの言葉を合わせないと表現できない言葉が、「もったいない」—この一言で表せることにとっても感動されたそうだ。そして、「もったいない」には命や地球資源など、かけがえのないものに対する尊敬（リスペクト）の意味も含まれている、と彼女は感じたそうだ。

確かに日本人は普段から「もったいない」という言葉を使う。では、本当に日本人は「もったいなくない」生活ができているのだろうか。

ところで、昨今食糧難の時代が来ると叫ばれているが、今現在私たちの生活においては特に食料が不足している訳ではない。実際世界中では年間二十四億トンもの穀物がつくられていて、これは世界中の人が生きていくのに必要な量の二倍に相当する。

一方で、世界では一体どれくらいの人達が餓死しているのだろうか。調べてみると年間一五〇〇万人、一日で四、五万人、一分間で三〇人以上の人達が亡くなっていることが分かった。そして、その七割以上が子供だった。

現在日本では年間五五〇〇万トンの食糧が輸入されるが、そのうちの三分の一にあたる一八〇〇万トンを廃棄している。この廃棄量はアメリカ等大国を抜き、世界第一位である。この一八〇〇万トンは三〇〇〇万人分（途上国なら五〇〇〇万人分）の年間消費食料に値する。また、このうち一〇〇〇万トンが家庭から出ているものだそうだ。

私は、このデータを見たとき、とてもショックを受けた。日本人は幼い頃から「もったいない」という言葉をよく耳にして育つため、ものを大切にする民族であり、日本人の心にはもっともったいない精神が根付いていると思っていたからだ。日本は発展途上国への支援をあれだけ世界中に呼びかけているにも関わらず、これだけの食料を廃棄していることには「最低」のひとつ以外に、思いつく言葉がなかった。

マザー・テレサは、食料が不足している子供たちのために、航空会社に頼んで機内食の残りをもたらしたという。残飯をもらってもなお食料が不足している国もあれば、当たり前のように嫌いな食べ物に残して捨てる国もある。この格差を日本人は知るべきではないだろうか。

そもそもなぜ、日本人はものを大切にしなくなったのだろうか。それは、現代社会にものが溢れすぎているからではないだろうか。そして、何もかもが簡単に安価に手に入る今の時

代、欲しいものを手に入れることが当たり前になってしまい簡単にものを捨ててしまうようになっってしまったからではないだろうか。

外国人であるマータイさんが気づかせてくれた「もったいない」という日本語の素晴らしさを、もう一度見直すべきだと思う。食料や資源は無限にあるものではない。限りがある。そのことを心の奥深くに眠っている「もったいない精神」が日本人の心から消えてしまわないうちに再認識したい。

「もったいない」はいつの時代になっても死語にしてはいけない言葉だと思う。そして欲しいものがすぐに手に入る今の時代だからこそ、決して忘れてはならない言葉だ。私は、世界に発信していきたい「もったいない」を。